

「インド考古研究会」について

小磯 学

インド考古研究会の発足は一九六六年五月のことである。今日まで実に三〇年近い年月が流れたことになる。このことは、現在幹事役を務める筆者、あるいは他の若手会員にとって、当時の状況は昔話にも等しいことを意味しているよう。しかし、その設立にあたって本会に託された活動主旨は、今日約七〇名にまで成長した会員の間にも脈々と受け継がれている。

本会初の会合は、当時東京大学におられた曾野寿彦先生の呼びかけによるものであった。その名称から明らかなように、この会がインド考古学に携わる人々の交流を目的としていることに相違はない。ただし、曾野先生は、本会が「肩のこらない自由な情報交換の場」となるよう、さらには、狭義の考古学にこだわることなく、さまざまな分野の人々との結びつきを深める場ともなることを望んでおられ

た。その背景には、先生が東京大学のイラク・イラン調査団の仕事に従事されるかたわら、西アジアのメソポタミア文明と南アジアのインダス文明とを広く彩文土器諸文化の脈絡のなかで考えておられていたという事情がある。このようなスケールの大きい問題に対処するには、さまざまな分野の専門家の協力、議論や視点が不可欠であった。

こうして、インド考古学の桑山正進、小西正捷、重松和男、月輪時房、丸山次雄の諸氏とともに、インド古代史からも辛島昇、山崎元一、山崎利男の諸氏が初期の会合を支えることになった。さらには、イスラーム期の諸問題や都市研究、インド文献学のほか、東南アジア考古学の研究者をも含めた二〇名近いメンバーが順次名を連ねていった。

「インド(南アジア)」、「考古学」、あるいは「研究」のどれか二項目に関連してさえいれば良い、という緩やかな姿勢は、考古学から「学」の字を取り去った「インド考古

研」と仮称しているうちに、それがいつの間にか正式名称として定着してしまうといういきさつにも現れている。会則もなく、会長もいないインド考古研究会は、当初は「何となく」曾野先生を代表者としつつ、年間六、七回の例会を行っていた。

しかし、こうしてその活動が途についたものの、早くも発足二年目にして、本会は取り返しのつかない大打撃を被ることになる。一九六八年九月の曾野先生の急逝である。さらに一九七一年一月には、丸山氏が他界された。氏は旭ガラスからインドに長期派遣され、その間に膨大な考古・文献資料を収集、旧石器から古代史全般にわたる諸問題に全霊を傾けて取り組み、他の会員に大きな刺激を与えておられた矢先のことであった。

それでもなお、解散することもなく、また「会を残さねばならない」という既存組織にありがちな大前提」にこだわることもしらず、本会は存続した。それだけでなく、一九七二年一月には会誌『インド考古研究』が創刊されている。

これは、発足当時から幹事を務め、その後本会代表者として会を支えられた小西氏と、近藤英夫・河野真知郎両氏の尽力の賜にはかならない。これは、毎年一冊刊行というスタイルの基礎を築き、その後一時的休刊状態を経たものの、宮元啓一、山内直樹、白田雅之、宗臺秀明、石川寛、小野

史苑（第五五卷二号）

寺マヤノの歴代幹事諸氏の努力によって、今日第一六号を数えるまでに至っている。今ではパソコンを用いて編集される原稿も、初めはすべて手書きの「ガリ版」で、そこに日本社会そのものが経てきた変化をだぶらせることも、あながち大げさではないであろう。

また、現在毎年偶数月（八月を除く）に開かれている例会は通算で一七〇回を越え、一九八三年から宮田鎌一氏のご提案とご協力によって実現した毎夏の「サマーセミナー」を加えるなら、本研究会で発表して戴いた方々の総数は延べ二〇〇名近くにもおよんでいる。さまざまな分野にわたる研究発表や書評、新刊紹介、また旅の報告は、ささやかなりにも、紛れもなく日本における南アジア研究史の一端を示しているよう。そこには、快くご発表・参加して戴いた、外国の研究者を含む会員以外の方々も多く、本研究会の特徴であるとともに大きな財産ともなっている。

会員諸氏のさまざまな形での協力と支えがあって初めてこうした歴史を刻んでくれたのはいうまでもない。しかし、曾野先生を引き継ぐ形で、本会の文字どおり大黒柱となつて支えていらしたのは、現在立教大学の小西先生であった。南アジアの考古学、民族学、文化誌ときわめて多岐にわたる分野について造詣の深い先生が、八面六臂の活躍をされているのは人々の知るところである。その結果、先生は当

研究会紹介「インド考古研究会」(小磯)

然ながら信じられぬほど広い人脈をお持ちになっている。
インド考古研究会の存続と発展が、先生のそのような人脈
に多くを負っていることは否定できない。

さて、かくいう筆者自身も、インド考古研究会に入会し
てから早くも一〇年が経った。その間、とくに二〇代、三
〇代の若手のインド研究者の層が着実に厚くなり、その研
究対象も分化、深化しているのをつくづくと感じる。南ア
ジア各地で長期のフィールド調査に携わることもきわめて
一般的になった。考古学プロパーの人々に限っても、この
状況はかわらない。曾野先生の構想が、いろいろな形でま
さに現実のものとなってきたといえよう。そして、発足か
ら三〇年が経とうとしている今、世代交代は確実に進行し、
さらに新たな実が結ばれつつあるように思われる。

一方で、研究対象の分化や深化は、研究全般が成熟の域
に達しつつあることの現れでもある反面、横のつながりを
困難にしていくなか側面ももっている。そのような現状に即し
た、会全体の活動や運営も考慮していく必要がある。そ
の一端を担うひとりとして、今後の課題を思案中である。

インド考古研究会

代表者 小西正捷

連絡先 〒一七一 東京都豊島区西池袋三―三四―一

立教大学文学部地理学研究室気付

小磯 学

(立教大学 大学院地理学専攻博士課程後期)